

夢見りあむは救われた  
い

桃音@まゆすき p

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

夢見りあむとプロデューサーの物語。

デレステとは少し設定を変えております。

おそらく最後の投稿作品になります。

どうか、暖かく見守ってください。

# 目次

夢見りあむは推したい	1
夢見りあむはスライディング土下座で逃げ出したい	9
あんちゃんだつて救われたい	14



# 夢見りあむは推したい

「しあわせならてをたたこー」

しあわせならてをたたこー

しあわせならたいどでしめそーよー

ほら、みんなでてをたたこー」

SNSを見ながらぼちぼちするとスマホを操作する。

今のぼくが幸せなのか、どうなのか

ぼくにはわからない。

大好物の餃子を頬張りながら、またSNSの通知を見る。

ああ。

今日も誰かに構ってもらえる。

誰かに注目してもらえる快感を知ったのは、いつだったっけ。

「やむ…。」



もしも。

仮にもしもだよ。

ぼくが今死んじやって、悲しむ人ってどれだけいるんだろうって考えてみてよ。

きつと誰一人としていない。

それはぼくが世界で一番よくわかってる。

わかっているからこそ、どうにもならない。

だつてどうもなんないじゃん。

尊いアイドルを推して、ブログに載つけて、なぜか炎上して、でもアイドルは尊い存在だから推し続けて。

でも、きつとそんなぼくが居ても居なくても世界はちゃんと1日に1回ぐるっと一周するんだよ。

「やむ。」





尊い。

推しが生きてるだけで尊い。

ありがとう。ありがとう神サマ。

「ぼく、生きててよかった…。」

ブログに今日の感想、あんちゃんの尊さを込めて文章を打ち込む。

ほんつと尊い。

あんちゃんが尊くないオタクはみーんなエアプーなに見て尊くないって言えるんだ

！

ほんつつとあんちゃんすこ！ずっと推す！推し変なんて絶対しない!!!

いや、ほんと推し変しちゃうオタクが信じられないわ。

推しを増やす、ならわかるんだけどさ。

押しを変える、はわかんなくね？ぼくだけ？

いや、誰に言ってるんだ。

とにもかくにも推しが尊い。

めちやくちや尊い。

尊さを、もつと伝えたいけど…。

けど、その前にチエキ列並ぼう。

「りあむちゃん、今日も来てくれてありがとうっ！」

推しが尊い笑顔で尊いポーズで尊い声でぼくを呼んでいる…なにここ天国か？楽園なのか??

なにを話したか覚えてはないけど、最高の笑顔の推しとにやけた面のぼくのツーショットチエキが一枚手に入った。

「うへ……うへへへへ……」

帰り道、手に入れたチエキを眺めながらにまにま歩いていたら

その時は急に来た。

「ねえ、貴女。

アイドルに興味はない？」

「  
へ  
？」

夢見りあむはスライディング土下座で逃げ出したい

「へ？」

「どうかしら……。」

私は346プロダクションの者なのだけれど。」

は？

346プロダクションって大手じゃん。

765プロダクションに並ぶ大手事務所じゃん。

「え、なに一世一代のバカなの？」

「いきなり暴言吐かれるととてもショックを受けるわね」

「あ、ごめん」

いや、待ってよ。

ぼくじゃないだろ。

「その…スカウトさん…。」

ぼくじゃなくてあんちゃんをもっと輝かせてよ…。あんちゃんあんなに頑張ってる

んだぞ。」

「あんちゃんさんは今は地下アイドルとして頑張って、いつか自分の力で上に上がった  
いって言ってたわ。」

「はあ?! あんちゃんと話したの?! いつ?!」

「あなたの後ろに並んでいたわよ…」

「は? いったよ。チエキか? チエキなのか?」

「さあ、聞かせて頂戴。」

「あなたにとってアイドルとは?」

「ぼくにとつてのアイドル?」

「そりゃ勿論尊い。アイドルは尊いんだ! よ!! アイドルがぼくたちを見てくれるからぼ  
くたちはすこすこのすこになっちゃうんだ!」

「努力して、汗水流して一生懸命がんばるアイドルが大好きなんだ。」

「じゃあその大好きなアイドルにさらに近付きたくない?」

「お近付きになりたい! あわよくばちやほやしたい! きれたい!」

「はっ、つい欲望がだだ漏れに。」

「ただぼくなんかアイドルになつて炎上しない?」

「多少なら炎上してもいいわよ。」

大丈夫なのか？このスカウトさん。

「…ただし、ネットの利用はある程度制限するわ。」

「やっぱ炎上するって思ってたじゃん!!!」

「ほら炎上商法でライブ中止になった例もあるし…ね？困るじゃない？」

「生々しいからやめろし！」

大丈夫じゃない。こいつまでもじゃない。ぼくもか！あはははは。

…じゃなくて。

「ほんとに…ぼくでいいの？」

ぼくには何も無い。

中途半端で放り投げるばかりで何も無い。

「貴女がいいの。」

ね、私の事務所にいらっしやい。」

待って。

ちよつとなんか引つかかった。

「…あ、あれ、スカウトさんじゃないの??」

「私はプロデューサーよ。」

スカウトさんだと思っていたことをスライディング土下座で30分近く謝り倒しました。

「じゃ、夢見りあむさん。

明日説明とアイドル達と顔合わせしてもらおうからよろしくね。  
書類も書いてもらうから印鑑と身分証は忘れないで頂戴ね。」

うーん、これガチでぼくアイドルになつちやう系ですか?大丈夫?怒られない?燃えない?やばくない???

「ち、ちなみに誰がいますのでししょうか?」



恐る恐る聴いた質問には

佐久間まゆちゃん…森久保乃々ちゃん…橘ありすちゃん…棟方愛海ちゃん…喜多日  
菜子ちゃん…遊佐こずえちゃん…佐城雪美ちゃん…。

名だたるアイドル。

やばい、もうぼく今日が命日でもいいや……。

# あんちゃんだって救われたい

ある日、

本当に突然だった。

「チエキ券見せていただきますねー」

「その前にちよつといい？」

私、346プロダクションの者なのだけれど。

この後時間をもらえるかしら？」

チャンスが突然舞い降りてきた。

私はそう思った。

だって、346プロダクション。

あの、しゅがみんが所属しているプロダクションなんだよ。

地下アイドルを続けて、何年も夢見た世界。

「はいっ。」

このチャンスを掴まなきゃいけない。

そう私は思ったんだ。

「346プロダクションの……と申します。

単刀直入に言うわ。

あなた、うちの事務所のアイドルにならない？」

正直、やったあつて小躍りしたくなつた。

でも私だつて立派な大人。

ちゃんと聞くべき事は聞かなきゃ。

「346プロダクションの所属アイドルになれる、という事でよろしいんですか？」  
「そうよ。」

私のグループは佐久間まゆ、森久保乃々、橘ありす、棟方愛海、喜多日菜子、遊佐こずえ、佐城雪美など……まだまだ多数のアイドルをプロデュースしているわ。」

具体的なアイドルの名前を聞いて、この人がすごい事だけはわかつた。

「え、あなたはただのスカウトではないんですね？」

「スカウトではなくアイドルのプロデューサー、ね。」

プロデューサー直々に声をかけて貰ったという事なのか。  
「そんな硬い顔しないで。」

今日あなたともう一人声をかけたい子がいるんだけど。

さつき私の前に並んでいた子。」

不意に自分のフアンの女の子の顔を思い浮かべた。

いや、多分違うよね。

「りあむですか…?」

恐る恐る彼女の名を呼ぶ。

「ええ。あなたの大ファンりあむちゃんよ。」

「うげ。まじですか。」

悪い子じゃない。むしろアイドル的にはとてもいい子。

単推し客はともありがたい存在だし、CDもチエキも握手券も買ってくれるいいファン。

ただ…

「あの子炎上しやすいです……よ……?」

「そうね。知ってるわ。」

あの子を見たときにね、とても輝く才能を感じたの。」

は？

口に出さなかった。

色々な気持ち混ぜ混ぜになって気持ち悪い。

待って、私をスカウトしにきただけじゃないの???

「私を見つけたんじゃないよ……りあむなんですか……？」

「……正直に言うそうね。」

悔しい。

素直に悔しい。

チャンスが舞い降りてきた！なんて浮かれていた私がバカだ。

そんな美味しい話なんて最初からなかったんだ。

最初からりあむに舞い降りてきたチャンスだったんだ。

夢見りあむが憎い。

憎いはずなのに全く憎めない。

とりあえずこの話は受けない。

私のプライドの為にも。

それに、もっと地下アイドルで……。

「めんなさい。」

この話はお断りします。

私、ちゃんと地下アイドルやってがんばります。

それで、もっと上に上がります。

346プロダクションのアイドル達よりも、ものすごいアイドルになるんですから  
覚悟してくださいよね！」

あーあ、私ってばもったいなーい。

でもこれでよかった。

地下のライブハウスに来る馴染み客が1人減った。

と、思ったけれどたまにチエキを撮りにくる。

そしてたくさんお客さんが入るようになった。

多分、この前のテレビであの子が「あんちゃん尊い！フオーエバー!!!」なーんていつも通り言い放ったからじゃないかな。

鏡を見て、衣装チエツク。

私はあの子がいう尊いアイドルなんかじゃない。

だから、私は尊いアイドルになりたい。

今度、便箋を買ってみよう。

りあむがきつと驚いてしまうようなファンレターを描いてしまおう。

きつと私が夢見りあむのファン第一号なのだから。

私を救ってくれたアイドルだから。